

---

# るーしー

松浦アエト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
るーしー

【Nコード】  
N8591Y

【作者名】  
松浦アエト

【あらすじ】  
還暦を超えたとある夫婦は、四十年以上共にした時間に終止符を打とうとしていた。ところが離婚届を役所に持っていく筈だった日の朝、二人の姿形は互いの青春をそのまま具現したように若返っており、同時に蘇った恋心は、離婚を決断していた夫婦を容赦なく揺らしてくるのだった。

## 始まりと終わりの朝

長年連れ添ってきた夫婦に離婚を決断させたものは 『意味の喪失』 だった。

高校時分には、緊張しながら握る手に意味があった。大学卒業後に同棲を始めたのは、互いを深く知る為に必要だった。まだ生活基盤が固まらないまま結婚に踏み切ったのは、若さ故の必然だった。授かった二人の子供の幸せを願うのは、親として当然だった。子供に十分な環境を用意する為、仕事に打ち込む日々を選んだのは、保護者としての責任だった。

夫婦を繋ぎとめていたものを愛情と表現していいのは、どの時点までだったか定かではない。

共働きを選ぶしかなかった若い夫婦が、それなりの生活水準を持つまでに出世した頃だろうか。可愛がってきた長女が、納得する好青年と結婚した時だろうか。心配だった三つ下の長男が、それなりの企業に就職できた時だろうか。老後を見据えても、十分な展望を見出せた時だろうか。

時と共に数々の憂慮が消えていき、同時に意味も無くなっていた。

夫婦が夫婦でいる事を望む者ももういない。成人した子供達は親の離婚に口を挟むことも無く、育ててくれた二人の気持ちを尊重する構えだ。

二人が別れる理由に、浮気や家庭内暴力などの分かりやすい理由はない。互いの何が悪かったという点は見当たらず、むしろ今まで

恵まれていたと言っても良いであろう。

夫が寝食に多大な不自由を感じるのなら、もしくは妻が金銭的に窮乏してしまうのなら、この離婚は成立してないだろう。なんとかできるだけの手段を持っている今の二人には、その打算的な絆すら持ち合わせてはいなかった。

望んで築き上げてきた筈の環境は、何時しか意味を求める事を強要するようになり、互いの愛情の喪失を確認させる使途となったのだ。

『不思議な夢を見た』

西暦20xx年、五月一日。

夫は毎日の日課である朝刊を流し読みながら、今朝方に見た夢の内容を反芻していた。その内容はかなり陳腐ではあったものの、表現しづらい現実感を伴っており、目が覚めた今でも頭の隅に残り続けている。

既に時計の針は出社の時間を指しており、そんな考えに興じている場合ではないのだが、昨年定年退職した彼にとつては悠々自適な朝のひと時である。縁側の障子は開け広げられており、朝の清々しい空気がさらさらと部屋に入ってくる。

既にローンを完済している一戸建ての中で、彼が決まって利用するのは和室調の居間だ。子供の事を考えてここ以外は洋室になっているが、彼の中で居間と言えば畳の和室なのである。

「……ん、おはよう」

居間にトコトコと入ってきた五番目の家族に挨拶をすると、甘えた鳴き声と共にあぐらに腰を落ち着ける。彼はその頭を優しく撫でながら、畳んだ新聞を机の上に置いた。

「るーしー。お前、今日出たか？」

夢の事を差しながらそう言ったが、るーしーにそれが分かるはずも無く知らん振りである。あぐらの上で再度眠りだしたのは、るーしーと名づけられたオス猫だ。子供の頃の長男が家の近くに捨てられていた子猫を拾ってきて今に至る。どこにでもいる雑種で腹が白く、背中から頭部にかけて黒や茶、赤茶のような毛色が混ざりあっている。パツと見三毛猫だが、そんな高級なものでない事は確かだ。名前は弟の猛烈な反対を押し切り、長女が命名。メスのような名前なので平仮名にしたらどうかと言う母の提案を、姉弟が受け入れて着地した。発声すれば同じなのだが、気分の問題だった。一家の大黒柱がした事と言えば飼う許可だけだったが、男親というものはそれ以外の権限をあまり持っていないのが一般的である。この猫を拾ってきた息子も、名付けた娘も今はこの家にはおらず、押し付けられたというのが親の正直な気持ちだった。

「おは……」

居間に誰かが入ってくる気配を感じ、彼は朝の挨拶と共に顔上げたのだが、言葉が不自然に途切れてしまう。この家にはもう、二人と一匹しか住んでおらず、入ってきた人物が誰かなどと確認するまでもないことなのだが、顔を見て挨拶するのは最低限の礼儀である。しかし何十年も交わしてきた当たり前のやり取りが、今この時ばかりは成立せず、その場にいる男女は息をすることすら忘れてしまうのだった。

離婚を控えているとはいえ、夫は妻に、そして妻は夫に、多大な感謝と情を持つている。決定的に仲違いをして別れる訳ではないので、離婚後も二人は顔を合わせる事があるだろう。

この朝の挨拶は二人にとって自然な流れであり、四十年近くの日々で毎日重ねてきた常識なのだ。ひとつだけ違う点があるとすれば、今日で最後の挨拶となる事くらいだろう。

「あなた、なの……？」

自信なさげに問い掛ける妻だったが、その胸中は説明できない確信に満たされていた。そしてそれは、呆然と妻の姿を見上げている夫もまた然りである。目の前にいる人物が、自分の愛した人間である事を見間違う筈が無い。事実、見間違う事など無かった。自分の名を言い当てるよりも容易く、互いが互いを誤り無く認識しているのだ。

それは還暦を越えた二人の姿形が、少年少女に成り果てていたとしても。

「……よ、う」

るーしーの鳴き声と共に入ってきた悪戯な風が、机の上の離婚届を畳に落として行った。

## 一日目 呼び方

桐嶋家の家族構成は、父の正孝、六十一歳。母の雪、六十歳。そして長女の明美、長男の啓太の四人家族である。付け加えるなら、猫のるーしーもその一員であろうか。二十八の娘は結婚しており、三つ下の息子も社会人になっていて、二人とも家を出て生活している。

そして今日は珍しく、数ヶ月ぶりに息子が実家に帰ってきていた。

「なんだよ父さん。いきなり帰って来いって言ったくせに用が無いってどういうことだよ。俺、仕事の途中だったんだぞ」

息子、啓太の言い分ももつともだった。啓太は地元に残まっているが、アパートを借りて一人暮らしをしている。それ程実家と距離が離れていないとはいえ、仕事を途中で抜けさせておいて用が無いでは通らない。分かっていたものの、夫婦には現状の打開の為そうするしかなかったのだが、息子のなんら変わらない様子に、希望が一つ途絶える事となった。

「よく分からないけど、もう行くからな。……………ちえ、離婚の話かと思っただのによ」

去り際にぼつりと零して啓太は家を出て行く。夫婦は引き止める言葉も思いつかず、その後姿を無言で見送った。

「もうこれ以上はダメじゃない？」

「そう、だな……。打ち止めにしよう」

残りの希望は娘ただ一人になってしまったが、啓太の態度から察するに結果は見えている。結婚している娘の明美を、わざわざ隣の県から足を運ばせるには忍びないと二人は思うのだった。電話で連絡しても、なんと説明すればよいのか途方に暮れるのみである。

今日一日、二人は自分の姿を知人に見せて回る事に奔走したが、一人の例外もなく普段と同じように挨拶を交わし、何の不自然な様子も無く別れの挨拶で締め括られるだけとなった。

夫が見る六十の妻の姿は、どう見ても高校生くらいにしか見えないう若さである。そして妻が見る夫の姿も、やはりそれと同様に若々しい。朝起きたら夫婦揃って若返っていたという珍事に、混乱してしまうのも無理は無かった。

もうすぐ日が沈む頃合。丸一日かけて調べて分かった事は、若返ったと認識できるのは夫婦間と本人だけであり、他人には六十過ぎの中年にしか映っていないという事実だけである。

「やっぱり、あなたにはそう見えてる？」

問い掛けられた夫、正孝は、立ち上がった妻、雪の姿を捉えつつ、今日何度目かの首肯を返した。

若返ったという認識はなにも姿形だけではなく、声や身体までもが該当していた。低く濁ってしまった雪の声は歳若い高音に様変わりしており、自身が感じる体の軽さは忘れかけている感覚そのものである。

「……………どうだ？」

畳を踏みしめて立ち上がった正孝は、雪の目の前に移動して同じ問いを投げる。

雪が見上げる長年連れ添ってきた男性も、やはり思い出の中の彼



と同じだった。160cmの自分より15?程高い身長。男にしては細身の体格。耳に少しだけ掛かる直毛の髪。学生時代からの落ち着いた雰囲気と、好みの容姿。自分を見下ろす包み込むような瞳。

「……え、と」

途端、雪は正体不明の感情の揺れを感じ、正孝から一步だけ身を退いた。不思議に思った正孝は退いていく雪に手を伸ばしたが、俯くその姿を視界に納めた瞬間、無意識に手を下げた。

正孝が見下ろす雪の姿も、思い出の中の彼女とぴたりと重なっている。顎の少し上にある頭。切れ長で二重の目。瑞々しい桜色の唇。落ち着きの無い小動物のような仕草が、細い体軀をより脆く見せる。髪型こそお団子に結わえられた現在のものだが、これを下ろして前髪を綺麗に整えれば、若き日と全く変わらない姿になるだろう。

「そ、そうだ……！ 病院に行ってみない？」

「一体、何科に行くと言うんだ？」

眼科か脳外科、次に精神科と浮かんだ雪だったが、もっともな返しに閉口した。こんな誰にも信じてもらえないような出来事をどう説明するのだろうか。寺でお払いでもしてもらったほうがマシである。

「だが、そうだな……。明日にでも知り合いの医者に会いに行つてこつした症例があるか聞いてこよう。今日はもう出歩かないほうが良い。何か起きてからでは遅いからな」

「……ええ、分かった。それにしても、あなたに知り合いのお医者様なんていたのね。接点なんて無さそうだけど、何時知り合ったの？」

雪はそう言いつつ、夫の行動など何時から把握していないのだからと記憶を漁った。

「空芝先生だ。何時知り合ったのかはかなり前のことなので覚えていない。腕は良いらしいし、なによりも信頼できる人である事は保障する」

「そらしば……さん。珍しい苗字ね」

正孝は今でこそ冷静に妻を引つ張っているように見えるが、異常に気付いた時の立場は真逆だった。慌てた正孝は救急車を呼ぼうとしたり、知人に事情をそのまま説明しようとしたり、いかにも軽率な行動に走ったのである。それを冷静に収めた雪は流石と言うべきか、古来より女は強しと言うのは、この夫婦間には当て嵌まっている。

しばらく動けない事を悟った二人は、畳に落ちている紙に同時に目を向けた。後は印を押せば完成する離婚届は、今の状況では保留にするしかなかった。

「……とりあえずご飯ね。朝から何も食べてないからお腹が減ったでしょう。正孝さんはなにがいい？」

一瞬早く離婚届から目を逸らした雪が、そう切り出して台所に足を向けようとす。普段なら別々に済ます事が多いのだが、こういう状況なら二人は納得した。

「ああ、雪に任せる」

雪の問いに、正孝も淀みなく返した。そういう答えが一番困るのよ、などと文句を言われている夫婦風景が星の数ほどある普通の問

答だったのだが、二人は驚いたように互いの顔を確認した。

「今……なんて言った？」

「あ、あなたこそ……」

相手の言葉も見逃せないものだったが、何よりも自分から出た言葉に驚く両者だった。夫婦間での呼び方は各家庭で様々だが、この夫婦の場合、夫は妻を「お前」と呼び、妻は夫を「あなた」と呼ぶのが何時からか定着している。第一子である長女が生まれた頃はまだ「父さん」「母さん」と呼び合っていた。第二子の長男が中学にあがった頃にはそうなっていただろう。さっきは新婚当時のような呼び方でさらりと言ってしまったのである。

「や、やっぱり今すぐ病院よ！ どう考えても私たちおかしいわ！ 正孝さんもそう思うでしょ？ ……あ！ ま、また言っちゃった……な、なんなのこれ！？」

「少し落ち着きなさい、雪」

「あ、あなたもサラッと復唱しないでよ。気持ち悪いからからやめて！」

「すまん……つい」

『つい』でその名を呼ぶことなど無いと分かりきっていたが、そう返すしかない正孝だった。

本来は腰痛持ちで、少しばかり前傾姿勢が目立ってきた雪だったが、今はピンと伸びた背筋でわたたと動揺を体現中である。正孝がそれほど動揺しないのは、雪のいない外ではそう呼んでいるからだ。対して雪は「あの人」一択である。ダメージ差は明らかだ。

「少し、おかしいな……。他に異変を感じるか？」

つがいの動揺した姿に冷静になる正孝。対して雪はまたしても全身を掻き毟りたい気持ちになったが、いつまでもこうしてはいけないと自分を律した。

「ハア、ハア、……え、えと」

しかしダメージは隠し切れないようである。

「今は自分とあなたが若く見えていて、体も軽い感じがするわね」  
「ああ、同意見だ。……他には？」

これだけ言葉を交わすのは一体何時振りなのかと、二人は遠い記憶を思い起こしていた。それほどでもない呼び方一つで違和感を感じるのは、ここ何年も必要最低限の会話しかしてこなかった事を意味している。

「おい」「ちょっと」「ご飯よ」「おはよう」等、数文字程度で日常会話は事足りてしまっていたのだ。それを夫婦仲が悪いと言う人もいるだろうが、本人達にしてみれば順風でもなく疎遠でもないといった認識である。

「後はさっきの呼び方だけけど……他にはない、かしら」

少し間おいて、雪は正孝を見上げながらそう言った。

「そうか。何かあったらすぐに知らせてくれ。もちろん私も知らせる」

正孝も雪を見下ろしながらそう言った。

互いの目に映るものは、青春時代を彩ったその人に相違無い。しばらくの間沈黙し、互いの姿を確かめ合う時間を欲したのは自然な

事なのか、それは当人同士にしか分からない。

「……私、もう寝るわ」

「ああ、それがいい」

先に目を切った雪は、重い頭を支えて力なく寝室へ歩いていった。やっと日が沈んだような浅い時間だが、午後九時には就寝する習慣になっている二人には少し早いぐらいの感覚だ。

正孝はその後姿を心配そうに見送った後、和室の上座に座り、朝読めなかつた新聞を広げた。政治家の汚職や企業業績の悪化など、朝刊には普段どおりの文字列が並んでいたが、いつもなら興味深いその紙面も今日ばかりは気を紛らわす事も叶わない。

「……ん？ ああ、お前を忘れていたな」

擦り寄ってきたるーしーが、飯を出せと猫パンチで抗議した。今日、何も食べていないるーしーは、ご機嫌斜めと言わんばかりに喉をグルグルと鳴らしている。棚から取り出した猫缶を床に置いてやると、るーしーは正孝の手を跳ね除けて猛然とがつつきだした。

「珍しいな。そんなに腹が空いていたのか？」

桐嶋家に来て今年で十三年目になる猫は、人間なら八十前後の高齢だ。その為か、ここ最近のるーしーの食欲は落ち込む一方であった。寿命という文字が頭に過ぎる程であったのに、今は家族に問題が起きた事などどこ吹く風の食べっぷりである。

何にせよ元気で良かった。今日始めて穏やかな気分になった正孝は、丸い頭の上にそっと手を置いた。お気に入りの猫缶を取られると思つたのか、るーしーはその手を忌々しく弾き飛ばす。彼は今日も平常運転だった。

一方、自室の布団で横になっていた雪は。

「……………眠れない」

## 二日目 意味の無いもの

若返りから二日目。

正孝は午前中から病院に足を運び、今は医師の問診をあらかじめ終えた所である。向かいのソファに座っている男性医師が、少々困惑した様子で語り出す。

「脳の障害や精神疾患など、いろいろな原因が考えられますが、桐嶋さんのお歳の認知症の一種ではないですか。いや、しかし……二人が同じ疾患を同時に発症するなど聞いたことがありません。力になれず申し訳ない」

六十一の正孝より一回り以上、上の年齢である老医師は、とても丁寧で柔らかい対応だ。雰囲気一つで人から好まれそうな人柄である。その高齢で未だに現役というのもまた風格を感じさせる。

「いいえ、先生には信じて頂けただけで大変感謝しています。私共も少し混乱してしまして、これ以上は正確に話を伝える自信がありません。今日のところはこれで失礼します」

「お大事に。何かあれば私の携帯電話に直接かけてください」

「そうさせて頂ければ助かります。何から何まで本当にありがとうございます」

地域密着型の高野医院。そこに籍を置く正孝の知己である初芝医師は、およそ荒唐無稽な話を信じて相談に応じてくれたものの、答えは誰もが予想できるものだった。正孝が早めに話を切り上げたのは、現時点で多くの情報を公開しても無意味だと悟ったからというものもあったが、なによりも家に残してきた雪が心配だったからであ

る。

昨日から何も食べていない雪は、今日の朝も呼びかけに応じず、部屋に籠りつきりになっている。最初こそ冷静だったものの、時間と共に不安が膨れ上がってきたのか、同じ不安を共有する正孝がその気持ちを理解できるのは当然だった。

「おい。起きてるか？」

病院から帰ってきたのはもう昼過ぎだったが、家の中に雪が起きてきた形跡は無い。不安なのは分かるが、いい加減引つ張り出してやろうと、正孝は強めに雪の部屋のドアをノックした。

「ひっ……！」

返ってきたのは不安とは程遠い、慌てたような雪の声だった。その後、バタバタと部屋を走り回る音が聞こえ、正孝は首を傾げる。

「入るぞ？」

四十年近く連れ添った間柄でも最低限のプライバシーはある。普段なら入られたくない時はすぐにそう答える雪であるからこそ、正孝は入っても良い状況なのだと思うとドアを開けた。

「……………」

そして、二人とも固まった。

雪が着替えをしていたというのは、散らかっている衣服により理解できる場所だったが、本来ならそう動揺するものでもない。二人が年若い頃なら、正孝は謝りながらドアを閉め、雪は恥ずかしそうに体を隠して悲鳴の一つも上げるだろう。今の二人は互いを知り



尽くした夫婦であり、雪が何も身に付けていない状況でも動揺する事などない筈であった。

しかし雪が着ているものが、捨てずに取っておいた娘の学生服ならどうだろうか。

「……すまん」

静かにドアを閉める正孝。女性に対して失礼な行為に該当するが、彼を責める人はあまりいないだろう。むしろ還暦を迎えた妻が娘の学生服など着ていたら、存分に泣いて良い場面である。

「違います

！」

雪はあわをくって否定したが、ひとつも違わなかった。着替えもせずドアを開け放った雪は、やはり娘の学生服姿だ。むしろその姿を晒す事で、見間違いだと思いついた正孝の努力をフィにしたのである。

正孝の視線は雪の背後に移っていく。タンスを引っくり返したかのように部屋中に散乱している衣服は、全て娘が残していったものだった。雪の衣服は離婚後の引越しの為まとめられていて、それを荷解くのが面倒になり、なら娘の服を着てみようという発想に至ったようである。

「べ、別にいいじゃない。若返ったらこれくらいしたくなるのが女なのさ」

一転して開き直る雪。開き直るしかなかったと変換しても可。

若返ったように見えているので年相応の格好にはなっているが、対外的にはおばさんが女子高生のコスプレをしているのだ。雪と正孝だから成立しているものの、このまま外に行こうものなら補導さ

れかねない暴挙である。

「化粧までしてるのか？」

正孝の問いは、雪が普段化粧していないという意味ではない。今の雪の化粧は、普段の年相応のものではなく、男でも一目で分かるような若い女子のするそれだった。

「明美の部屋にあったから借りちゃった。あの子ったらこういうの結構持つてるのね、知らなかったわー。ま……あ、あなたも啓太の学生服とか着てみたらどう？ ……あら、どうかした？」

開き直った雪は生き生きとして声を弾ませるが、正孝の様子に異変を感じて問いかける。

「っ………な、なんでもない。明美が怒るから早く片付けなさい」

今まで静止していた正孝は雪から大仰に視線を外し、足早に立ち去っていく。伝えようと思っていた診察結果など、忘却の彼方だった。

「うん、こんなもん……かな」

正孝が病院から帰宅し、しばらくが経過した午後の三時。

雪は未だに娘の服と格闘中だったのだが、ようやく一区切り着いたように自分の姿を確認した。何十回目かの試着の末、白のインナ

ーシャツの上に薄紫色のカーディガンを羽織り、下はベージュのロングスカートという春らしい格好に決まったようだ。落ち着いた色で統一されているので、齢六十の女性が着けていても不自然ではなく、五月に入っただばかりの季節柄にも合っている。上品な奥様をイメージさせるコーデイネイトであるが、全身鏡に映る十六、七の少女にも清楚さを映えさせる服装である。

初日に知人や息子に会った時のリアクションから、他人には体型的にも普段の姿が映っていたと二人は結論を出している。若くなくなってしまった体型の雪が外出するなら、娘の服を借りるしかないのである。

「ま……………あなた、少し出掛けてくるわね」

和室の縁側でるーしーと和んでいる正孝に一声掛け、足を止めずに廊下を擦り抜けていく。玄関で靴を履いている時には、引き止める声は小さくなっていった。

「ああ……………。若いつて素晴らしい」

目的地への移動に徒歩を選んだ雪は、体全体でその違いを実感していた。慢性的な腰痛を持っている雪は、症状は軽いものの普段はなるべく徒歩は避けている。十年後には老人ホームで杖を突いている姿さえ想像していたのだが、今はどうだと言わんばかりに足を前に進ませていく。

「おばさん、こんにちは！」

近所の少年がすれ違い様に挨拶。走りながらでは礼儀がなっていないとは言えないが、挨拶がきちんとできる分、今時には感心な子供である。

「……………くん、にちは」

一気に現実に取り戻された雪の返事が、かなり遅れてしまったのは言うまでも無い。走り去った少年はもう遙か遠方であり、誰に言っているのか分からない状況になっている。今日は朝から自分の若い姿に浮かれていた雪だったが、正孝と自分以外の目には、やはり六十のおばさんに見えるのだ。

たしかに雪は浮かれていたが、それ以上の喪失と不安を感じないわけではなかった。見下ろす手の平は、二日前まで皺だらけだったそれとは違い、瑞々しい若さに溢れている。だがそれは同時に、長年積み重ねてきたものを無くしたに等しかった。家事全般を担ってきた雪の手は、本来なら水洗いで荒れていたり、ひび割れていたりと、包丁で深く切ってしまった跡がある。雪としてはそれを誇りや矜持などと大仰に言う気はないが、近いものである事は間違いない。昨日一日かけて頭を切り替えたつもりでも、完全に忘れて浮かれるなどあり得ないことだった。

だが雪はこれを良いことだと思おうようにし、行動にもそれを心がけるようにしていた。それも当然で、年老いた人にとって若返るといふのは夢のような出来事なのだ。これで不満があるなどとは口が避けても言えないものである。世には辛い事のほうが多く、早く寿命を迎えたいという人も多く存在するが、雪は常々そう考えないようになっている。良く言えば前向き、悪く言えば楽観的な性格である。

「いらっしやいませ。あら雪さん、こんにちは。こちらにどうぞ」

目的地である駅前の理髪店に入ると、店員が慣れた様子で雪に近付いていく。改装されて小洒落た店内にいる客は、雪を除いて中年

女性が一人だけ。予約もせずフラリと立ち寄れるのが良い所、と言つては失礼極まりないが、その点が雪の足を向けさせる一因になっている。常連である雪は店員の案内に従い、鏡の前の椅子に腰を下ろした。

「今日は一段とお若いですね。羨ましいです」

五十過ぎの店員は、決してお世辞などではなくそう褒める。還暦にしてはという意味だと百も承知の雪だったが、鏡に映る少女の姿を見てなんとも可笑しい気分になった。

「あら、ご機嫌ですね。なにか良い事でもありました？」

「ええ、少しだけ」

それは良かったと柔らかな笑みを浮かべる店員。雪とはおなじみの空気感だ。

「今日はどうなさいますか？ まだ目立ってきていないと思いますか」

店員は生え際を手で梳きながらそう言った。今の雪の髪型は、頭の天辺に纏めた髪をお団子にしている状態だ。本来は白髪染めにこの理髪店に来る機会が多かったのだが、今はまだ必要なほど目立つてはいない。

それに今の雪の頭の中には、白髪染めの選択など一切無い。決めていた注文を言い出すのに、少し躊躇したのも当然だった。どんなに自分が若いと思っても、世の中には何にでも年相応というものがある。着る服にも一苦労したように、自分には少女、他人にはおばさんに見えるというアンバランスさは相当なものだ。

その注文はミニスカートをレジに持っていくような気恥ずかしさ

に等しいものだったが、雪の中にある若き日への憧れは、それを言葉にする事を決断した。

「……遅いな」

正孝が壁にある時計を見ると、雪が出て行ってから三時間以上が経過していた。普段なら雪の行動など気にも留めないが、今この時ばかりはそう無関心でいることもできない。

縁側でベターッと寝転がっているーしーを一度撫でた後、正孝は携帯に連絡を入れてみようと思いつき立ち、普段より軽く感じる足で立ち上がる。

「ただいま」

丁度よく玄関から帰宅の声が上がり、正孝は一つため息を零す。今の状態の自覚が足りないと言注意しておこうと、何年か振りに妻の帰宅を迎える事にした。

「お前、こんな時に出歩いて……いい、と……」

勇んで玄関に出て行ったものの、言葉は勢い無く沈んでいった。

「ど、ど、ど……」

雪は少し赤らめた頬で、緊張気味に正孝を見上げる。雪はこんな時にふざけ過ぎだと怒られる事を覚悟していて、事実、少し前まで

そうだったのだが、正孝は変わり果てたその姿を呆然と見るしか出来なくなっていた。正孝が見る雪は、若き日に恋焦がれた女性そのものに化していたのだ。

「な、なにか言ってくれないと……」

どうしていいか分からないとばかりに雪は俯く。

理髪店で整えた髪は、遠い記憶にある姿に近づけるようにしていた。ストレートパーマをあてた長い黒髪は背の中頃まで下ろされており、一直線に整えた前髪は学生時代と変わらないチャームポイントになってる。それらを不自然なく成立させているのは、髪の艶やかさであろう。本来なら染め残した白髪や、痛んだ髪で損なわれる筈の、いわゆる天使の輪まで出来ているのだ。六十もの年齢の髪ではそうは行かない。

そしてその姿に合うように、店員に若作りと思われるのも覚悟でした化粧もそのように仕上げている。着衣は娘のもので少し昔の印象とは異なるものの、今風にアレンジしたと思えば許容範囲である。それどころか、こんな服も似合うのかと今更発見した気分の正孝であった。

雪はじつと俯いたまま正孝の言葉を待っていたが、それは自分の姿へのリアクションが気になるだけではなかった。雪が見る正孝も、衣服を除けば恋焦がれた男性そのものなのだ。居るはずも無いその人に延々と見下ろされては、目を逸らすしかなかったのである。

「っ！」

そして二人は同時に悟る事になる。二人を襲ったこの出鱈目な現象は、肉体だけの若返りなどでは決してなく、時間そのものが巻き戻ったのだと。何故二人がそう確信したのかと問われれば、そうで

なければ説明がつかないと返すしかないだろう。

吸い込まれるように目の前の女性を抱きしめた衝動も、男性に抱かれた瞬間一際大きく高鳴った心臓も、今の二人には意味の無いものなのだから。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8591y/>

---

るーしー

2011年11月27日00時49分発行